

## テント一週一文（り）—— 脱原発 川内テント

（承前）

もうこの話は止めましょう、のつもりで「いい天気ですね」と言ってみたものの相手には通じない。

「何がいい天気ですか。今にも雨がきそうじゃないの」

「ドイツばかりじゃなく、スイスやイタリア、台湾や韓国でも脱原発なのに、日本の反原発運動はこの天気のようにですね。パッと晴れませんね」

「晴れないわね。権力とお金と情報と人を持っている原子カムラが共謀に共謀を重ねているからね……。それはそうと、雨だとここのテントも心配だけど、川内のテントは心配ね」

「川内はお家があるじゃないですか」

「エッ、川内はテントじゃないの。お家があるの？」

「エッ、ご存じないのですか。お家があるって言っても、テントを閉じたわけじゃなくて……」

「あら、アフター・チェルノブイリ・ジェネレーション…」と、片仮名を加えて、「…なのによく知っているわね」と揶揄しているのか褒めているのか分らない微妙なことを言う。

「あなたは川内のテントのことはご存知なのですね」

「私はよくは知らないのだけど……」と、さっきまで説教していたのとは打って変わって、しおらしいことを言いながら説明してくれた。

「経産省前のテントって知っている？」

「知っていますよ。訪問したことはありませんが」

「14年の秋だったと思うけど、その経産省前のテントに来ていた方が再稼働第1号といわれていた川内原発の近くの海岸に抗議のテントを張って町の人たちに原発反対を訴えたのよ」

「東京から九州に？ 大変だったでしょうね」

「大変を通り越していたと思うけど、海岸を掃除したり、近くの子どものためのイベントをしたりして地域の人にだんだん受け入れられていったのよ」

「川内の海岸って、ウミガメが産卵に来るところじゃないのですか？」

「そうそう、そうなのよ。よく知っているわね。お生まれは鹿児島？」

「いえいえ、福岡、この近くです」

「じゃ、この近くは目をつぶっていても自転車で走れるでしょう」

「目はつぶりませんが、大体は分ります。それはいいですから、川内の話をしましょう」

「そうそう。ウミガメが来やすいように海岸をきれいにしているのよ。そして、テントは毎年、毎年って言っても2015年、16年の2回だけだね、「脱原発 川内テント（ ）周年記念パーティー WITH ウェル亀ロックフェスティバル！」を開いているの」

「たいしたものですね」

「そうなのよ」

「努力の甲斐あって、ウミガメさんは増えているのでしょうかね」

「以前からウミガメのことを気にして海岸の掃除などをしていた方の報告だと、増えていないのだから。かえって減っているそうよ」

「海岸をきれいにしてもウミガメさんは来てくれないっていうわけですか」

「この『脱原発川内テント報告 (3)』にその理由が書いてあるわ。原発が海と海の生き物たちを殺し続けているのよ」

「じゃ、この報告はぜひ読んで欲しいですね」

「短いし、難しいのはダメ、のあなたもすぐ読めるわよ」

「…… あのですね ……」

「なに？ 何か気になること言った？」

「…… 何にもないんですけど、その川内テントに大朗報があったのですよ」

「あっ、それが、さっきあなたが言っていた家のこと？」

「ピンポン。川内で家を手に入れたのですよ」

「良かったわね、いつ？」

「まっ、これを読んでみて下さい。あなたは、斜め読みでもすぐに分るでしょう、きっと」

「江戸の仇を長崎で討つの？」

「イエイエ、とんでもありません。横文字の読める方は、縦の字も早く読めるだろうと思っただけですよ」

「だって、川内テントの資料は横書きじゃない！」

「そうでした」

(以下次号)

(文責 栗山次郎) 2017年11月17日公開

-----  
[川内テント通信 \(5月23日・5月24日\)](#)

[脱原発川内テント報告 \(3\)](#)

[「脱原発川内蓬莱塾」設立趣意書 \(2017年5月5日\)](#)